それで今度は十の電氣一の電氣と云ふ正式の名を用ゐて、本の繪を見せながら色々しやべつた。

「政一さんなんかはどん〳〵學問を研究して、立派におなんなさるばかりでさあ。」

「どうして僕なんかだめです。」

「どうです、その中に會社へ參觀においでなさいな、わけが解つて居れはきつと面白ござんすよ。」

「えゝ行きます。行かれるんですか。」

「會社の者が一所に行けば入れます。」

實際齋藤さんは好い人だ。參觀と云ふ言葉は齋藤さんには珍らしい言葉だが、何となくうれしい言葉である。僕は愉快でたまらない。來年は高等學校の試驗なんで、伊藤は文科だつてが僕はどうしても工科だ、工學博士、社長さん、電燈會社、高等學校……なんと云ふ事が頭の中を馳け廻るに從つて、僕はべらべら調子に乘つて學校の話しをした。

所へぢやん〳〵と半鐘の音である。どきつとして話しをやめて齋藤さんを見ると、齋藤さんもさすがにそつちへ氣をとられた。

すぐ立つて南の窓を明けた。僕の部屋は二階だから火事が南ならすぐ見える。がらつと明けるとぼう〳〵燃えて居る。近くはないが南千住の内だ。表は風が惡く強い。僕はどき〳〵してくる。風は本當にいやだ。

二人で立つて見て居ると、下から母と妹が上つて來た。

「何處です。新町あたりでせうかれえ。」と母が云ふ。

「新町にしちやちつと左ですれ。田圃の方の百姓家かも知れません。」と齋藤さん。

「いゝえあなた、通りははづれて居ませんよ。中々曲つて居ますもの。」

窓の下にも人がぞめく。星ばかりで嗜い晩だ。

「兎に角私は行つて來ます。どうもちよつと出て御馳走になりました。政一さん御邪魔でした。」

「おやさうですか。どうもおそなそ樣、寒いに御苦勞ですれえ。」

「僕も行つて見やうか、おつ母さん。」

「およしなさい。寒いに藝もない。明日の朝早いんだからもう御休みなさい。」

僕はやつぱりよす事にする。齋藤さんは會社の知人が二三人居ると云つて出かけて行つた。ふう〳〵吹く風の中を出かけて行つた。

僕は母や妹と一所に下りて、間もなく床に入つたが、風の音が寂びしくつていつまでも眼が冴えて居た。

土曜日

水野仙子

「吉田、吉田」

第三教室の南の窓から首を出して、田口先生は一人受持生徒を呼んだ。

「は」

と勢よく、吉田ば組んで居た友達の手を放して矢庭に驅け出して來た。

「これ投函して來てくれ」

と、先生は長い其二本の指に繪葉書を挾んで手を延ばすと、吉田は埃によごれた足の裏を見せて漸く受取つた。そして姿勢正しく一禮して、踵を返すと、離れた處に此方を見い〳〵待つて居た友達の、藁草履に赤い素足も近寄つて來る。

拭はずに擱いた筆も氣にかゝり乍ら、猶窓許を離れないでゐる先生の目は、首を集めて見ながら行く、二人が遊歩場の縫目を辿つた。向ふから勢よく驅けて來た鬼事の一群に、一寸足を止められた吉田は、つと

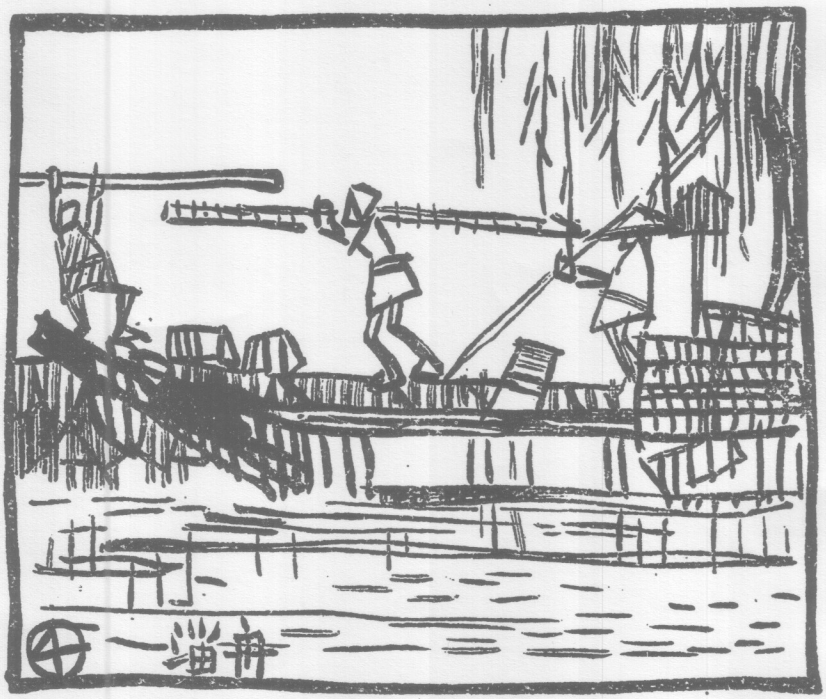
首をあげたと思ふと、鋤のあけしやの樹に、身をぴったりと蜩のやうに密着けて居た一人の背をぽんと叩いて駆け出した。叩かれた子は、隠れた身も忘れて飛び出して、いきなり二人の肩に手を掛けて覗き込んだ。歩みは暫し遲くなつた。

三人は同じく高等一年生である草書は讀めないのだが、眞ん中頃にある「無事着致し候」とだけは讀めたのであつた。宛名は門多波子様とある。

「奥さんだ！奥さんだ必と！」

叩かれた子は縺けざまに叫んで、思ひ出したやうに吉田を叩き返した。二人は短い袴を蹴つて門を出た。

漸く机の前に戻つた先生は、堅くなりかゝつた筆の先を、噛んでは反古紙に捧をひき〳〵、思ひは早くも彼の繪葉書が、三里の山道を、振る手調子宜い配達夫に擔がれて、狹い乍ら小ぢんまりとした家に投げ込まれたものとして、それを抱いて嬉しげな、新妻の笑顔を思ひ泛べた。今度け低い、松林を背負つた小さい村の學校に、女生徒の繪の中にはいつて、手を叩いて居る姿が目に浮ぶ。其姿が床しく流れる、風のある日、「薬にふ」のかげから現はれて、柿の木の下のポンプ小屋を右に曲る外套の人は先生である。曲れば近道の長傳寺の前庭、蹈まれてくづるゝ其日かげの霜柱は冬の響である。其日も木堂に夕べの勤行がはじまつて居た



舟溜り　京都　前川千帆

それは一昨日の土曜日であつた。一晩二晩宿つて今朝早く下宿に歸つた先生は、先刻野間といふ若い准教員が「通ふに引かへ歸る身の……」なんとかと云つた語を思ひ出した。火鉢に手を翳して、口許で笑つて、優しい目は、先生の眞面目な、顔に注いで居た。野間准教員は文學が好きで、種々の雜誌などを見てゐるから、何か會心の新体詩でも口誦さんで居るのだらうと少しも意にしなかつた先生は今になつてさつと顔を赧めた。途端に氣魂しく始業の鈴が鳴り響いた。吉田は息せき歸つて來て、繪葉書を投函して來たとを告げた。此前の前の土曜日、田口先生に珍らしく欠勤した。それは霜解けの道

は悪るかつたが、日影の差したうらゝかなる日で、代つて教壇に立つたのは野間先生であつた。體操の時間に、西洋のお伽噺をして喜ばれたこの若い先生は田口先生は今日、美しい奥さんを貰ふのだと生徒に話した譯もなく生徒はわあと聲をあげて笑つた。次の月曜日に、何氣なく出勤した先生の髪は綺麗に刈られてあつたので、生徒のうちにくす〳〵笑ふ者があつたが、先生は相變らず眞面目に教授をして居た。

奥さんは矢張り師範校出身で、若い後のお つ母さんが居るので、あまり悲かしがらなかつた。先生の故郷の、仁井田といふ村に教鞭をとつてゐる。

「田口君、後は僕が引受けたから早く出掛け給へ」

などゝ、土曜日毎に調戯ふ同僚の言葉にも顔を赤めなくなつた頃は、奥さんのお腹に愛の魂が宿つて居た。

それから重い身には一番極い夏も過してほつと息をついて、そろ〳〵寒さに向ふた十月の半ば頃、「田口君お目出度う！」「君お芽出度う」と口口に祝辭をのべられるやうになつた。然しそれも眞んの僅かの間、奥さんは産後の肥立が悪るくて、遂々可愛い子を殘してあの世に逝つてしまつた。五日ばかり欠勤んで出校した先生の顔を、滅切頬がこけたと云つたのも見る人の氣の故ばかりではなかつた。生徒は先生が、此頃やたらに怒りつぽくなつたと言ひ傳へた。

降りもせず、照りもせず、曇つてゐるやうで其癖光線のいやに眩しい中冬特徴のぴりゝとした寒氣のある朝、やはり土曜日であつた。始業の鈴が鳴り渡つて整列して、高等三年の生徒も教室にはいつたが、教壇の上の椅子は依然として机に組まれたまゝ、田口先生は遲刻したのであつた。うづ高くふべた火鉢の炭は、一分毎に黒きを減して、嵌んなところは弱い煙をさへあげて居る。鬼が居ぬ間と悪戯組は、そろ〳〵後を向きかけた時、上草履音忙しく先生がはいつて來た。

「禮！」

と俄に大人しくなつた、級長の號令で一禮する。

珍らしく先生は和服で、羽織は紋付、揉みあげのあたり剃りあと青々として、口唇も日頃より鮮かに見えた。すらつと一渡り生徒を見廻して黒板の隅に書いつけた欠席生徒の姓名を消して、手の粉を輕くはたきながら、

「先生は今日、ちと都合があつて休みますから、國語を此時間に復習して、二時間目は習字、三時間目には清書を書く。そして歸つて宜しい。級長！これを渡して」

硯箱の上の作文帖を取つて渡すと、生徒は靜かに動搖めいた。

同じく土曜日であつた。先生は都合あると欠勤して、其晩仁井田で結婚したことを思ひ出す生徒は一人もあるまい。それから二年は夢の樣に過ぎた。彼の事其事を生徒に教へた野間先生は、今年の春、兎に角大なる抱負を持つて、出京した。生徒の數も今は餘程減つて居る。先生は一度高師の試驗を受けて落第した。

亡い奥さんの從妹で、遺された澄子を、並ならず可愛いがるといふ、今年十八の人と、今日結婚するやうになつた先生は、何とはなしに教壇を下りて窓の傍によつて唾をした。斑もなく、流れもせず、濁つたやうな空の色、人の心をひき締めるやうな日である。櫻に錨の校旗がひらひらして居る旗竿の下に、門前の長屋の子で、啞者とも違ふ口のきけない、感觸のない不具の子が、枕を背負つて、それでも躰を左右に搖つて居る。がら〳〵と音して圍ゐの外を人力車が過ぎた。山高帽を冠つた車上の人の、白い毛の耳袋が目を引いた。

外套を被つて門を出た先生は、濁つた空を仰いでふと二年前の其日を思つた。其日は霧解けの、屋根々々から水蒸氣のたつ、うらゝかな、心の底の底までも解けさせないでは、やまないやうな日であつた。

雨夜

若松操

「村越が郷歸るつてれ、君聞いたか。」と遊びに來た同郷の友某が思出した如く言つた。

「うむ、聞いたよ、一昨年其話ながら村越が來てれ、何でも其時にや今夜發つやうに言つたが、今し方來た手紙で見ると、都合で明日の朝にしたさうだ。」

「何で郷歸るか知つてるかい。」

「母が病氣だからといふちやないか、然うぢやないのか。」と私は訊いて見る。

「僕にも然う話したさ、けれども二三日前に故郷の友達から來た手紙で見ると、彼の戀人が懐妊してるんだよ。」

「え、懐妊？」と覺えず一膝乗出した。

「うむ、而してれ、其れが戀人の親達に知れたと思給へ、大變にごたごたが持上つてれ、其揚句、二人を正式に結婚させやうつて事になつたんだとさ、僕は其の相談で歸郷るだらうと思ふ。」と緩く莨の煙を吹く。

「然う、然うだらう、些とも知らなかつたよ。」

「僕も其手紙を見て、初めて知つたやうな譯さ。」

友は猶其手紙に就いて悉しく話した。

此村越といふのも私達と同郷なので、今年二十二、牛込に下宿して私立大學に通つて居た。關係した女の信子と呼ぶは、故郷の耳……と謂ふ町に教師をして居たもので、渠より一つ年下の、先つ美人に近い方といつても可い。

二人が甘い言葉を交したのは、二年許前の春村越が歸省した時で。今でこそ村越の戀人と言へば同人間知らぬ者もないが、其の時は誰一人心着きもしなかつたらう、同じ郷黨の中でも最も親しくする私さへ、朧氣乍ら其れと知つたは餘程後の事なので。

だから最初の中は無論双方の親達も知らずに居た、けれども二人の浮名が漸く高まるにつれ、薄々耳にも入つて來たので、さあ、急に慌て出した、其中をば引裂かうとしたのであるが、併し此時已に二人が間には肉の交があつたので、容易く手を断らせる事は能はなかつた。

是は其年の十月頃の事、夏歸直したまゝ、村越は病氣した其時分迄郷里に止まつて居たのである。

此時二人が醜聞は、狹い田舍の町を、驚くばかり速かに流れて了つた。

隨つて、村越はともあれ、信子は最早教師もしては居られなかつた。

滿足な結婚も望まれなくなつたのである。

其處で、中へ人が入つて、色々と奔走した結果は、二人を行末結婚させるといふ事になつた。けれども其は表面に現れた事實で、親々の内心は非常な不滿足があつたらう、だからともすれば煩く事件が持上る。

併し其後の二人は益々接近せずには居らなかつた、而して遂に懐妊して了つたのである。

「可愛さうだな、」

「何がさ、」と友は直ぐに聞返す。

「村越がさ、結婚した上で上京する事が出來るんだらうか。」

一昨日暇乞に來た時の言葉付から察して見ても——勿論打明けての上